

教員の自己点検・評価シート(2024 年度秋学期)の分析

2025 年 6 月 3 日
教学マネジメント会議

教養教職機構

1. 全体的な傾向

①授業改善と自己点検

- ・各教員が授業内容や進め方、資料の見やすさ、能動的学習の導入などに取り組み、自己点検を通じてより良い講義を目指していることが確認できる。

②学生の興味関心と学習意欲の向上

- ・時事問題や身近な話題の提示、本物に触れる機会の設定、メディア資料やコンテンツの活用、グループワーク、学生同士や教員との対話やディスカッションを通じ、学生の興味関心を引き出す工夫や学ぶ楽しさを実感できる授業デザインを工夫していることが確認できる。

③知識定着と双方向のやり取り

- ・課題や練習問題、討議、ミニツツペーパーを用いた足場かけ的な学習支援が行われ、学生が何を学んだかを重視する姿勢が見られる。さらに、学生への声かけやフィードバックを通じて教員と学生の双方向のやり取りを大切にしていることが確認できる。

2. 特筆されるべき事例等

- ・多くの科目において、「学力差」に対する様々な手立ての工夫や個に応じた丁寧な指導の提供がなされている。(学生の学びにくさに対して、課題の提出方法や板書等の工夫、課題提示の方法、個別指導の工夫等、教員の試行錯誤や工夫が確認できる。)
- ・「基礎演習」において、各担当教員の様々な工夫がみられる。
 - ・生成 AI を活用した学習課題の提示に加え、学生同士の相互評価の機会を重視することで、学生の知識理解とスキルが向上した。
 - ・協同学習をメインにした授業デザインにより、学生同士の親和的な互惠的相互関係が育まれ、学生の意欲を喚起した。
 - ・議論を呼ぶような問いや自分事になるようなテーマ設定の工夫等、学生の状況に応じて、多面的かつ様々な動機づけを高める工夫がみられる。

3. 改善事項の発掘

- ・学生の授業への取り組みに対し、教員側が様々な工夫・改善を試みる一方で、学生の受動的・消極的な授業態度や学びに対する目的意識・意欲についての温度差等の記述がみられる。学生のコミュニケーション力や主体性等の課題を指摘する意見もあり、学生の現状やレディネスを把握しながら、引き続き、学生への学ぶ目的の明確化や学び方の創意工夫、意欲の喚起等について検討していく必要がある。

4. アクションに向けての要検討事項等

- ・各科目における学生の学習意欲向上に向けた工夫・改善を引き続き検討すること。
- ・次年度から 3 学部混在で実施される予定の初年次教育について、到達目標及び実施の在り方等を再考・再検討すること。

経済学部

1. 全体的な傾向

- ・全体として、多くの授業でシラバスに掲げた到達目標は「概ね達成できた」との自己評価が示されており、合格率の高さや学習成果の定着が報告されている。特に、リアクションペーパーや課題提出などアクティブラーニング的手法を取り入れた授業では学生の理解度が高く、良好な結果を得ている。
- ・Google クラスルームの活用が定着しつつあり、「資料配布」や「課題提出」を通じて授業外学習の支援にも活用されている様子がうかがえる。

2. 特筆すべき事例等

- ・特筆すべきは、ミクロ経済学や財政学の講義において、統計データの最新化や時事的話題の導入が行われていた点である。
- ・「Excel による図解」や「事例分析」など視覚的・実証的な理解を重視するアプローチも実践されており、抽象的概念の定着を助ける工夫がみられる。こうした取り組みは他の授業にとっても参考となる実践例といえよう。

3. 改善事項の発掘

- ・一部の授業では「板書の視認性」や「スライドの見やすさ」など、基本的な授業運営に関する改善課題が明記されていた。
- ・Google クラスルームの未使用や限定的利用にとどまる講義も複数見られ、ICT 活用におけるばらつきが課題として残る。
- ・「学生との議論をもっと深めたい」「復習のための資料を工夫したい」といった記述も見られ、インタラクション型の授業設計に対する課題意識が共有されていることがわかった。

4. アクションに向けての要検討事項等

- ・Google クラスルームの「資料配布」「課題提出」機能の活用は、極力習慣化できるよう支援すべきである。
- ・効果的な「視覚教材(スライドや図解)」の作成技術や「インタラクティブな設計(討論やペアワーク)」を教員 FD 研修の中で扱うことが望まれる。
- ・優良事例を学内で発信し、他教員の参考とする仕組みがあればなおよい。

データサイエンス学部

1. 全体的な傾向

新しく開設された学部であり、この秋学期開講科目についても全ての科目が新規開講科目である。データサイエンスに関する基礎的知識を学生に身につけさせるために、各教員が創意工夫を凝らした講義・演習を行っていることが確認できた。

2. 特筆すべき事例等

- ・データサイエンス学部はノート PC を必携化している。自身の講義内容修学のためだけではなく、2 年次以降の講義・演習を考え、より高度な分析ができるための PC 環境を学生に構築させている事例が見受けられた。
- ・本学部は文理融合の学部であり、入学時に数学・情報が得意では無い学生が一定数存在する。そのような学生に対して、補講の実施・穴埋め資料の配付・講義内での復習を行い、丁寧な指導をしている事例が見受けられた。
- ・学生が自力で問題解決を考える姿勢を身につけさせるために、グループワークを行いながら、個人で課題を考える時間を設けるなど、工夫を凝らした演習を行っている事例が見受けられた。

3. 改善事項の発掘

- ・高校側のカリキュラムの変更（共通テストでの情報科目追加、数学科目の内容修正）に対応する必要がある。
- ・データサイエンスの授業を受けるうえでの、基本的な IT リテラシーが身についていない学生について、対応を検討する必要がある。

4. アクションに向けての要検討事項等

- ・演習系の授業を行う場合、教員 1 名では対応が難しい場合があり、学生の TA などを検討する必要がある。
- ・高等学校においての、情報 I・II・数学 I・II・III・A・B・C の履修状況の事前把握・教員への周知を検討する必要がある。
- ・データサイエンス学部ではノート PC を必携化しているため、基礎教養科目などの受講時にもノート PC 利用を前提とした履修を検討する必要がある。

国際交流センター

今年度秋学期の各授業の目標は概ね達成され、学生の意見表明やレポート作成力の向上が見られた。語彙・文法・読解・作文を統合し、学生の主体性を重視した授業が実施された。ラーニング・マネジメント・システムを利用して学習支援を行い、授業内では意見交換や協働作業を多く取り入れた。現代社会に関する学生同士の議論や母語・母文化との比較、日本文化体験など、多角的な学びを展開した点が特筆される。今後は、学生のレベル差に配慮した語彙

選定、意見交換の促進、発表の振り返りや語彙指導の充実が必要。また、課題の出し方や授業時間配分、到達目標の明確化、クラス構成に応じた工夫も求められる。ラーニング・マネジメント・システムの更なる活用も課題として挙げられる。